

Dream Space

在ることの有りがたさ

…… 一年を振り返って

まほろば主人 宮下周平



「お父さん、早く来てー、大変!!!!!!」
家の外で、家内の叫ぶ声!

浄活水器エリクサーのセラミックを焼くため、焼成炉のある札幌に一週間ばかり家族で帰っていた。その間、石狩後志地方は大雪で、仁木の家はどんなになっているか、気が気でなかった。

案の定戻ってみると、深い雪に、車も止められず、家にも入れず、しばし呆然^{ぼうぜん}。やっと玄関までの道を付け、車を遠くに置きに行った処だった。

飛んで、帰って見ると、家中水浸^{びた}しの、我が目を疑う光景。

「何という事だ!!!!」

台所の水道管2か所が破裂し、そこから勢いよく四方に水が飛散している。床も家財も水に浸ったまま。だが、水が止められない。築60〜70年、水抜き栓が45年も経って半分効かなくなっていたのだ。果たして、何日間、水が噴き出していたのか!

キッチンとリビングのテーブルも、ソファも、絨毯^{じゅうたん}も、水の中に在り。食べ物などもプカプカ水に浮いている。寝室の畳も2畳ほど濡れて、衣類も水浸し。ただ放心状態、何をすべきか手も足も出ない。長靴のままそこに突っ立ってしまった。



勿論、ストーブも水に浸かり、基盤が損傷して火が着くはずもない。零下の中、震えながら作業するしかなかった。水道管の穴をテープで防ぎ、水流を弱め、家財を動かし、水を掃き出す。床下もどんなになっているかとやら。床板の継ぎ目がどす黒い。見渡せば、植木が皆枯れている。かわいそうなことをした。

何処に連絡すればいいのか、咄嗟に思い付かない。ネットで町内の水道工事業を探し出したが、午後過ぎてからでないと来てもらえない。また、ストーブ屋は夜7時という。それまで、何とか寒さを凌ぎながら、家中を片付けながら待った。

夜、幸いストーブが着火し、安堵の胸を撫で下ろしたが、ソファも椅子もびしょ濡れで座る所もない。

この時、文明の便利さを当たり前に享受している人間の無力さと知恵の無さに愕然とした。そして、もっともつと過酷な水害や津波に立ち会った時の動揺の幾分なりとも体験出来たのか。その痛みがほんの少し解せられた。今年の道東の台風禍、5年前の東北大震災の津波、自然の猛威と爪痕、それは想像しても仕切れない大変さを感じた。

この時、幼い日々を思い返していた。

戦後すぐの片田舎の町には、水道などの基盤設備があらうはずがない。みなの家が手押しポンプであった。それでも極寒の朝は、ポンプの中は凍り付いて押すにも押せなかった。湯を沸かし、熱湯を注いでは溶かして、水を上げていた。水甕一杯に汲むのが子供の仕事だった。水は柄杓で一杓一杓、鍋に薬缶に遷していた。小学生になり、そこにモーターが入り、井戸から蛇口



に一気に流れる水を見て、どれほど驚いたことか。

それが、何時しか水道水に代わったのは、私が内地から帰省した時だった。

蛇口を捻れば、水が出る。誰しも、これが当たり前だと思っている。その変遷を知らないがゆえに、水の有難さも感じられない。水は、どうして、ここに在るのか。どうして、ここで飲めるのか。そんな素朴な疑問さえも抱く要がなくなってしまった。

もっと昔は、近くの川に桶を背負って汲みに行っただろう。そして、庭に井戸を掘って、鶴瓶落として汲み上げたものだろう。何れも、飲むまでに手間暇のかかることだった。

無くて、初めて、有ることの有難さを感じる。

水をこうして飲めること。火に当たって暖を取れること。食べる事、寝る事、それは、本当は当たり前でなく、とても難儀なこと、とても有難いことなのだ。

田舎に来て、不便なことが、実は大変な意味があることに、気付かされる。

週に一度、札幌の店に帰る。夜、家には食事の道具立ても無く、ただ寝に帰るだけだ。外食せざるを得ないとき、やはり、家に帰り手作り料理の温かさや安心感を求めるのだ。それがどんなにか大切なことか。

そして、今まで当たり前のように、文字通り湯水の如くエリクサー水を飲んでいたことが、当たり前前に飲



めないことにも愕然^{がくぜん}とするのだ。家でもエリクサー水が飲めない（仁木の方に持って行っているのだ）。この現実に出会って、改めて今までの環境に想いを巡らせた。

.....

今年は、まほろば創業以来の大きな節目の年でした。

私たち夫婦が、仁木町に引っ越し越して営農を始めたからです。

お客様には突然の出来事だったかもしれませんが、役員や農園の社員には少し前に知らせ、一年以上をかけて土地探しをしたものの、これが難航に難航を重ね、住む家もなかなか決まらず、途方に暮れていたところに、ある方の仲介で、ギリギリで突然に決まったのです。

これにより、多くの方々に、ご心配とご迷惑を掛けて参りました。

しかしながら、原点に戻り、ゆっくりと時間をかけて、しっかりと根を張って、まほろばを下支え^{ささ}出来る存在になりたいと思っています。

惜しまれながらも、まほろばの社長・専務らしいと言って下さる方々もあり、これが一番うれしく思えます。

それでは、私と家内の愛して止まないお客様や生産者の方々、取引先の方々、そして従業員の皆さん、よいお年をお迎え下さいますように。

— 風雪の仁木より —